# 竹内好論

## ――国民文学論争における政治と文学――

内藤由直

本稿の目的は竹内好が提唱した国民文学を動的な対抗概念として措定すると同時に批判することである。この目的に至るためには国民文学確立を実践課題とする竹内の国民文学論が生成されてゆく現場に立ち会う必要がある。そしてここで大きく前景化されるのは、政治と文学の関係を竹内がどのように捉えていたかという問題である。

竹内の国民文学論が最も強く抵抗したのは文学に対する政治の介入であった。戦後国民文学論争は小田切秀雄が「直接の端緒は、サンフランシスコ条約で日本の運命がアメリカの従属国、軍事基地として『合法化』された前後の泡立った社会的空気とそれによる日本文学の微妙な身じろぎにある」（「国民文学論の意味するもの」『法政』一九五三・四）と述べているように、また前田愛が「共産党の政治路線の変更と消長をともにした」（「国民文学論の行方」『思想の科学』一九七八・五）と日本共産党の「五〇年問題」に大きく影響された論争であったと指摘しているように、論争当時の政治的状況と不可分のものであった。しかし竹内はこうした政治的状況が「文學外の強制として、作爲的に、文學に働きかけることには、私も反対である。そのための國民文學、手段としての國民文學なら、反対だ」（「國民文學の問題點」『改造』一九五二・八）と述べ、政治の介入に潔癖なまでに反対し文学の自律性を主張した。

だが、こうした非政治的国民文学論に対しては多くの批判が向けられた。菊池章一は「元来いかなる提唱も政治的なものである。それは既存の関係を変えることを提唱するという意味でそうであり、そのために既存の関係に働いている顕在・潜在の力を新しく別様に結集するという意味でそうである。すでにそのことの可能が既存の関係のうちに見出されるのでなければ、提唱は無意味である」（「国民文学論の教訓」『新日本文学』一九五四・二）と竹内の議論における非政治性を批判した。同様に佐々木基一も「伊藤整とか臼井吉見などという人は、國民文學の提唱の中に政治的底意がありはしないかと先ず疑ってかかったらしいが、わたしはむしろ反対に、そこに本當の政治性が見られないことに不滿であ

つた」（「リアリズムと國民文學」『群像』一九五四・四）と竹内の国民文学提唱が非政治性を先験的に措定する文脈で受け取られたことを批判している。

一方で竹内の非政治的振る舞いの中に政治性を見出す批判もあった。福田恒存は「左翼の國民文學を政治的だと非難し、自分のは、純・文學的な國民文學だと主張するのは私などの眼から見れば、むしろより政治的であり、したがつて政治の陰險さを露骨に感じさせられるのである」（「國民文學について」『文學界』一九五二・九）と述べ、政治を回避しようとする竹内の姿勢の中に潜在する政治性を批判している。

論争の渦中に発せられた右記のような批判は幾度となく反復され、現在では国民国家批判の傍証として竹内の国民文学論における政治性が批判されている。しかし政治的であるか否かと政治性を軸に竹内の議論を裁断する批評には、その画一性において我々に態度変更を迫るものがあり、またなぜ竹内は文学を政治に対峙させたのかという問いかけが見失われてしまっている。では竹内はなぜ文学を政治との対抗関係の中で捉えなければならなかったのか。だが我々はこの問いに答える前に、竹内の国民文学論がどのように構築されていったのかを俯瞰しなければならない。

## 〈政治／非政治〉

竹内の国民文学論における最大の眼目は文壇の解体であった。周知のように国民文学論の伏線としてあった『山びこ學校』（無着成恭編　青銅社　一九五一・三）は、文壇文学の狭隘さを批判しその特権的な閉鎖空間を指弾するための恰好の証左となっていた。臼井吉見はこの『山びこ學校』に逸早く注目し、国民生活の広さと複雑さを表現する少年達の綴方に文壇文学には見られないリアリズムを看取し、逆に「國民生活の廣さとむすびつくことを避けるところで成立してゐる」（「展望」『展望』一九五一・五）文壇文学を厳しく批判した。この臼井の文章を受けて竹内は「亡國の歌」（『世界』一九五一・六）を書く。竹内はこの中で臼井の発言を「批評家の側からの文壇文學への不信の、總括的な、最大公約數的な、意見の表明と考えていいだろう」と一般化し、「文學者は問題をかれらが文學と信ずるもののワクのなかだけで考えて、その文學を成り立たせている廣い國民生活の地盤については考えていないようだ」と述べ、こうした事態を「思想性の欲如」という言葉で表した。文壇という「温室」に住まう文学者たちは「文學の純粋さを守ろうとして、じつは文學をダラクさせている」と竹内は臼井同様に文壇を批判し、読者（国民）の生活に根差した文学の創造を求めたのである。

竹内は「日本の文壇とよばれるものは、特殊なギルド的社會であって、一定の資格を公認されなければ参加できず、参加することによって身分的特權を取得する方式になっていた」（「社會と文學」『文學』一九五四・三）と述べるように、文壇をギルドと捉えていた。だがこのギルドは職能集団ではなく閉鎖的なヒエ

ラルキーを構成する集団であった。竹内は「インテリと民衆の結びつき」（『國民講座Ⅰ日本の思想』河出書房　一九五一・十）の中で「それぞれのギルド内部には親分子分の階層的秩序が支配していて、獨特のヤクザ的モラルをもち、仲間だけしかわからぬフチョウ的用語が通用している。ギルドのオキテに從つて、外とのコミュニケーションは堅く禁ぜられている」と述べている。こうした特権的・閉鎖的ギルドの存在によって「インテリと民衆とは、職能的にでなく、身分的にへだてられている」と竹内は考える。「インテリは、全體社會の頭腦作用を機能的に代表するものでなければならない」と竹内は述べ、民衆とインテリの有機的結合を何よりも強く主張する。それは文学という表現の場においては、民衆の生活とその表現が直結することを意味していた。竹内が『山びこ學校』を高く評価する動機はこの意味においてであり、また文壇を批判する動機も同様である。『山びこ學校』は文壇という枠を破壊し、身分的に抑制された民衆表現の可能性をすくい上げた例証だったのである。

こうしたインテリと民衆の乖離、表現者と読者との隔たりを解消するものとして竹内は共通の広場の構築を訴える。「共通の廣場」という言葉は『文學界』誌上で行われた座談会「現代日本の知的運命」（『文學界』一九五二・一）から導き出されたものであるが、この座談会では文学者や政治家といった各専門分野の閉鎖性が問題となり、そうした職能的孤立をどのように解消していくかという議論が行われていた。竹内は実現が目指されるその広場を「共通の広場（私の註を加えれば、国民文化の創造の場）」と理解し、その目標を「インテリと大衆の隔絶状態をなくすことにある」と考え、そしてこの目標に至るまでに障壁となるであろう方法論的問題の「その処理のために、民族という要素が、今後、重要な課題になってくるだろうと思う」（「『共通の廣場』に出る」『日本読書新聞』一九五二・二・十三）と述べている。竹内は民族を国民文学の表現主体・読者主体として位置付けたが、それはインテリと大衆が融合した共通の広場の外延であると同時に広場そのものの表象という意味を持っていた。また竹内が考えるこの共通の広場とは、共同体の構成員が共通の言葉で話し合える場であるとも考えられた。しかし竹内はこの共通の言葉が不在であると考える。竹内は「國語が成立しているかいないか（私はいないと思う）」（「文學の自律性など」『群像』一九五二・十二）、あるいは「このごろは、教育の力で標準語が相當に普及したことは、認めなければならないと思います。しかし、その程度はまだまだ低いものではないか」（「『國民の文學』とことば」『文學』一九五四・一）と述べている。即ち竹内が考える国語とは、教科書的な言語に限定されるものではなく、法律や公文書、あるいは軍隊内で用いられていた一般的ではない閉鎖的な言語を解体した後に構築される国民の全てに通用する普遍的言語を意味していた。

竹内の国民文学論の最も基底にある戦略は、このように文学の創造と消費の現場を広範囲に開くということにある。文壇を解体し普遍的言語を用いて民族・国民という大枠に文学生産・文学消

費の現場を開くこと、竹内は文学表現が文壇に占有されまたそこからのみ文学表現が紡ぎ出される円環構造を批判しているのだ。それは文学表現―文壇―文学表現の関係が、文壇―文学表現―文壇の関係に倒錯し閉鎖空間を拡大再生産していった文学の現場をもう一度原初の状態に戻し、自閉空間を切り開く可能性を常に保持しながら再び新たな文学表現を生産していこうとするものであった。ゆえに竹内の国民文学論はこの目的のために積極的に他者の導入を図っていく。

国民文学論争の起点とされる竹内　伊藤整との往復書簡（「新しき國民文学への道」『日本読書新聞』一九五二・五・十四）には既にそのことを見て取ることができる。竹内は伊藤への往信の中で文壇文学への不信から国民文学の確立が提唱されていることを指摘し、この国民文学確立という目的のための議論をどのように編成していくべきかを問い、そして近代主義　反近代主義に批評家・研究者の思考様式を腑分けし整理を試みた。竹内のこうした整理方法は独創的であったのだが、しかしそれ以上に留意しなければならないことは「同じ国民文学の提唱者にも、桑原氏のような近代主義的な立場からするものと、その反対なものとがあるわけです。二つの派が国民文学の規定づけを争うわけであって、この対立を明確にすることは、問題を実践的解決に向って進める上に有益だといえます」と竹内が述べている箇所である。つまり竹内にとって国民文学とは、所与の実在ではなく、その内容を規定付ける議論の実践であった。ゆえに竹内は「私はさらに、この問題については、歴史家や言語学者や、民俗学者の参加を期待します」と述べ、この実践の場に専門外の人間を介入させようと試みるのである。共通の広場の構築を念頭に置く竹内がこのように述べることは殊更奇異ではないが、しかしこの竹内の言葉を他者への寛容と考えてはならない。伊藤が返信の中で「同一の批判基準の確立」を提起したことに答えて、竹内はそのような一局的な裁断によるのではなく「あらゆる問題について対立をはつきりさせて行つて、お互いの対立を含み合い理解し合う形で、もつと高い次元での結びつきを待つ方がよいのじゃないか。どうもいいかげんなところで妥協してしまう癖がありますが、これはやめて行きたいと思います」（座談會「國民文學の方向」『群像』一九五二・八）と述べている。つまり竹内にとって国民文学論という実践の場は非妥協的な議論を永続させる場であり、竹内はそこで常に衝突を生成させるために絶えず他者を引きずり込むことを意図しているのだ。文壇解体と国民文学確立という当初の目的を果たすことはなかったが、管見の範囲でも百人を越える論者が参加した戦後国民文学論争は文壇・学界・ジャーナリズムを横断するポリフォニーを出現させたのであり、この意味で文学を巡る議論の場を開いていこうとする竹内の企図は確かに実践されたと考えられる。

ところで「politics」の語源を想起するならば、竹内の国民文学論の実践、即ち共同体の構成員（民族・国民）を当該議論へ参加させること、そのための場の編成を「政治」と呼ぶことが可能

であろう。これは狭義の政治、例えば「黨派的に中立というのが本誌の建て前だが、國民文學の創造という目標に對しては中立ではありえない」（「編集後記」『文學』一九五二・十[5]）といった類の表現が含意する政治とは異なる「政治」概念である。この「政治」概念を前提とする時、竹内の国民文学論が政治的か非政治的かと問い得る二項対立的な位相は存在しない。なぜなら竹内の議論における政治性を批判する際に我々が担保としていた非政治的位相の幻想は跡形もなく粉砕されるからである。（同様に非政治的であると批判する際の政治的立場も次元が異なる。）政治の優位性論が措定する政治や国民国家批判が対象化するナショナリズムの政治性は、竹内が創出する「政治」空間の埒内にある。竹内の国民文学論がその他凡百の議論を突き抜けているのは、この全構成員を議論に巻き込むという「政治」の実践にあり、それは政治的か否かと問い得る些細な二項対立を無効化するラディカリズムに貫かれているのだ。我々は竹内の議論に介入するに当たっては常に既に「政治」的であらねばならない。ゆえに竹内や国民文学論が政治的か否かの問題系は全く問題ではない。ここで我々に求められているのは、狭義の政治を軸としたヘゲモニー闘争ではなく、この「政治」の場それ自体に対する態度決定である。だが我々はその前にこれまで留保していた問いについて考察しなければならない。即ち竹内はなぜ「政治」の場で文学を考えなければならなかったのか。

## 〈政治／文学〉

竹内にとってイデオロギッシュに矮小化された政策としての政治は無用だったが、しかし開かれた議論の場という「政治」空間は国民文学にとって必要不可欠であった。竹内の国民文学論には「政治」が当為であったが、ではその理由は何か。それを明らかにするためには竹内の想定する国民文学について考えなければならない。

竹内の目的は、国民文学確立のための場を構築することであったが、当然国民文学そのものを確立することも目的としていた。論争の渦中において竹内は「國民文學は、そのものとして存在しないし、イメージをえがくことさえも、十分にはこころみられていない」（「國民文學の問題點」）と、国民文学を不在の形式として位置付け議論の興隆を促すが、しかし竹内は国民文学論争に先行して独自の国民文学概念を想定していた。

平野謙・荒正人と中野重治の間で交わされた「政治と文学」論争を批判した「中國文學の政治的性格」（『思索』一九四八・九）の中で、竹内は「日本では、政治と文學という問題の立て方が、青野季吉以來の、歴史的な課題になつている。おそらく世界中に、こんな形で問題を出してくる文學は、ほかにないだろう。そこでは、政治が目的化されている」と述べ、このような問題機制の在り方を「後進國の型」と呼んだ。竹内によれば「政治は、文學がそこから自分を引き出してくる場」であり「文學が社會的

に開放された形であれば、場の問題が價値の問題と混同されて文學の内部にもちこまれるはずがない」。「文學者が、文學の問題について發言することが同時に政治的な發言でありうる」のだ。竹内は中国を例にとり、中国文学にはそのような「政治」と文学の区別が存在しないことを指摘する。

> 矛盾は、戰後に、中國文學の方向について戰後も戰爭中と變りないこと、つまり對目的には民主の徹底、對外的には一切の帝國主義からの獨立に根本の目標があり、その線の上で個々の文學の問題が論じられなければならない、と書いている。これは日本の文學者から見れば、政治的な發言と思われるかもしれない。事實また、日本でおなじようなことをいったら、そうなるにきまつている。しかし中國では、そうでない。矛盾の見方に對するものでも、それが文學的發言であることを疑うものはない。そこに政治感覺のちがいがある。
>
> （中略）
>
> 「民主と獨立」という矛盾の主張は、かれの文學的發言であるとともに、このような國民的意志を高度に集中的に表現した言葉だと思う。そのような表現が可能であるのは、社會構造の近代性、したがつてまた文學の國民文學性（規模はまだ小さいが、これは時間の問題だ）による。それは中國人の總意をあらわしている。そしてそれだから文學的である。

竹内は「日常的な要求が、つみかさねられていつて政治的要求に組織されるときに、それに文學的表現を與えるのは文學者の責任であり、その責任が文學者に自覺されているのである」とも述べ、「政治」と文学の不可分な関係を強調していた。竹内の国民文学概念にはこのような「政治」と文学の重層的決定が含意されている。しかしここで誤解してはならないことは、「政治」と文学がそのまま同一化されると竹内が考えているわけではないということである。では竹内が考える「政治」と文学の関係とはどのようなものか。

「政治」と文学の関係に対する竹内の原理的な考察は既に『魯迅』（日本評論社　一九四四・十二）の中に表れている。竹内はこの中で「政治と文學の關係は、從屬關係や、相剋關係ではない。政治に迎合し、あるひは政治を白眼視するものは、文學でない。眞の文學とは、政治において自己の影を破却することである。いはば政治と文學の關係は、矛盾的自己同一の關係である」と述べていた。魯迅の読解を通じて竹内が述べているのは、「政治」と文学の関係性を静的な対称性へと固定化することへの批判である。文学を功利的な政治の手段と化すこと、ならびに文学を「政治」から完全に独立した純粋な作品として矮小化すること、これら二つのベクトルのいずれにも欠落しているのは、「政治」と文学の関係性における動的なダイナミズムである。竹内は次のようにも述べている。

政治は行動である。從つて、それに對決するものもまた行動であらねばならぬ。文學は行動である。觀念ではない。しかしその行動は、行動を疎外することによつて成り立つ行動である。文學は、行動の外にでなく、行動の中に、廻轉する球の軸のやうに、一身に動を集めた極致的な靜の形で、ある。

（中略）

眞の文學は、政治に反對せず、ただ政治によつて自己を支へる文學を唾棄するのである。（中略）なぜ唾棄するかと云へば、そのやうな相對的の世界は「凝固した世界」であり、自己生成は行はれず、從つて文學者は死滅せねばならぬからである。文學の生れる根元の場は、常に政治に取卷かれてゐなければならぬ。それは、文學の花を咲かせるための苛烈な自然條件である。

このように竹内にとって「政治」と文学の対立は短絡的な二項対立ではない。「一身に動を集めた極致的な靜の形」として捉えられる運動体としての文学概念、そして自己生成を機能不全に貶める「相對的の世界」の否認は、いずれも「政治」と文学の対立を対称的・固定的に把握することへの批判である。竹内にとって「政治」と文学の対立は、文学生成の動的過程そのものとして捉えられなければならないのだ。

しかし、竹内のこうした弁証法的思惟の過程で、我々は「政治」と文学が揚棄されるまさにその瞬間において「政治」と文学を区別し得る。「政治」という場から文学が自身を引き出してくる時、その動的過程は一旦停止してしまわざるを得ないだろう。では我々は国民文学において「政治」と文学を区別できるのか、また区別できるとするならばそれはなぜできるのか。

竹内は「中國の近代と日本の近代」（『東洋文化講座第三巻』白日書院　一九四八・十一）でこの問いに答えている。竹内はここで「Aが存在するということは、Aが非Aを排除するということである」と書いている。Aと非Aの関係を本稿の文脈に置換すれば、A（文学）　非A（政治）となるだろう。文学は「政治」を否定的媒介とし生成される。ここで我々が注目すべきはAと非Aの対称関係ではなく、Aと非Aを結びつけている述語である。Aと非Aを結節する排除という述語は論理的に正しいが、しかしその論理的正しさはなぜ正しいのか。竹内は述語の位相における内部と外部の差異に注目し次のように述べている。

中國文學を後進國文學として映す日本文學の目は、中國文學を正しく映しているだろう。正しく――まさに「正しく」である。カメラのように正しく、時間空間を二次限に引きなおして見せることにおいての「正しく」である。それは自分が歴史にはいりこまないで、歴史というコオスを走る競馬を外から眺めている。自分が歴史へはいりこまないから、歴史を充實させる抵抗の契機は見失われるが、そのかわり、どの馬が勝つかはよく見える。中國馬はおくれている。

日本馬はどんどん抜いている。それはそう見える。そして、そう見えることは正しい。正しく見えるのは自分が走つていないからだ。

竹内はここで我々の認識論的布置の限界に触れている。事象の正しさは歴史（＝動的過程）を疎外することによって保証されているのであり、我々が物事を正しく見られること、即ちAと非Aが一つの述語によって結節されることは動的過程の疎外という一定のコンテクスト上でしか機能しない「正しさ」なのだ。竹内のこうした認識論を本稿に援用するならば、「政治」と文学が対立していると見えること、その認識の「正しさ」はそれらの対立を対立として俯瞰できる者のみが持ちうるものであるということになる。しかしその超越的視点に立つものは常に運動の外部に位置する。つまり「政治」と文学の二項対立を析出し得る我々は他者なのだ。

ここで竹内の国民文学論が他者を「政治」空間に引きずり込むことを意図していたことを思い出すならば、その「政治」空間から自身を現象させる国民文学において、「政治」と文学を整然と区別し得る超越性などどこにも存在しないということがわかる。「政治」という場から文学が生成されるその動的な現場に立ち会う限り、そこでは「政治」と文学の対立を看取することはできない。ゆえに国民的意志を高度に集中化した国民文学は、「政治」的でありかつ文学的なものとして両義的に確立されるのだ。我々は竹内の国民文学論に巻き込まれる時、国民文学の中に「政治」と文学の区別という明瞭な境界を設定することはできないのである。

竹内は国民文学を自律性を持った文学として位置づけたが、しかし竹内の言う自律性は「それはただ政治から自分を區別するということのなかに働いているだけであるようにみえる」（野間宏「國民文學について」『人民文学』一九五二・九）と受け取られた。これに反論して竹内は「私は、政治と文學とは機能的に區別しなければならないことを主張しただけである。文學は政治を代行しえず、政治は文學を代行しえない。目的は全人間の解放であり（中略）その目的にたいして政治と文學は、それぞれの側面から責任を持たねばならぬのである。（中略）それぞれの機能を責任をもつて果たすことによつて、目的のために有機的に結ばれたものが、眞の自律性である」（「文學の自律性など」傍点引用者）と述べている。誰にも理解されなかった竹内の「文學の自律性」が意味するのは、文学創造の場において「政治」と文学を実体的に区別し得る超越的な視点の不在だったのだ。竹内は「文學は政治にたよろうとし、政治は文學を利用しようとすることで、なれあつている。したがつて文學は文學として弱く、政治には倫理的な自立性が乏しい。だから思想性がはつきりしない」（「中國文學とヒュウマニズム」『人間』一九四八・十二）とも述べている。政治と文学の対立に腐心し饒舌を弄する非行動者に対して竹内は問答無用と言っただけなのである。

## 〈結託／拒絶〉

竹内は「敵を倒す唯一の方法である對決」に至るためには「相手の發生根據に立ち入って、内在批評を試み」（「近代主義と民族の問題」『文學』一九五一・九）なければならないと述べている。本稿は竹内に従って竹内に対する内在批評を試みてきたが、これまで確認してきたことは竹内の国民文学論における「政治　非政治」・「政治　文学」の二項対立の失効であった。竹内はこれらの対立を流動化させその対立自体を機能不全に陥れる。ゆえに竹内の議論に政治を析出し批判すること、その担保として文学の純粋さを金科玉条とすることは、竹内の議論以下にある。しかし我々にはまだ二項対立は残されている。それは竹内の国民文学論と結託しその議論の場を維持するかまたは拒絶するかの対立である。私の考えでは、竹内の国民文学論は等閑視できない錯誤の存在によって拒絶されなければならない。その理由を以下に結論として提示するが、しかし我々はその論理をこれまでの論述において既に手にしている。竹内への批判を竹内の論理を以て行うこと、即ち「相手のやり方を相手に適用する」（魯迅「『フェアプレイ』は早すぎる」『魯迅作品集3』竹内好訳　筑摩書房　一九六六・十）ことによって、議論の場それ自体が孕む矛盾が開示されることになるだろう。

では竹内の国民文学論はなぜ拒絶されなければならないのか。それは他者を議論に引き入れる共通の広場として設定された国民文学創造の場を、他ならぬ竹内自身が閉ざしているからである。

まず容易に看取できるのは、旧植民地、特に朝鮮に対する竹内の無関心であろう。日本政府は「日本国との平和条約」の締結によってようやく旧植民地の領有権を放棄し朝鮮の独立を認めたが、それと同時に内地戸籍を持たない中国・台湾・朝鮮人及び婚姻等によって内地戸籍から除籍された者の日本国籍を剥奪した。[17] 竹内の国民文学論は、その議論がまさに実践されている時代の渦中に国民でなくなった人々に対して注意を向ける必要を感じていない。[18] 日本に限定された民族・国民概念はこうした非日本民族・国民を冷厳に排除する。竹内が設定する「政治」空間への参入にはこうした資格要件が予め設定されているのだ。

更に国民文学論への参加資格をもう一つ、竹内と野間宏の議論の間に見出すことができる。竹内と野間の間には文学の自律性を巡って意見が交わされたが、野間は竹内が唱える文学の自律性概念の空隙を突き、「私は竹内氏が文學の自律性という言葉を使ったとき、ただそれだけで、その自律性の内容がどのようなものなのであるのかをとらえることができなかった。（中略）この文學の自律性の内容、またその考え方そのものが現在大きく變ろうとしていることに對して、十分考えつくしていないように思える」（「國民文學について」）と竹内を批判した。そして野間は自らが考える文学の自律性概念をもとに国民文学をレジスタンス抵抗文学と概念化していくのだが、一方竹内は共産党の綱領を文学理論

に援用する野間に対して「黨員藝術家の悲劇」を見取り、「政治のプログラムをそのまま文學に適用したという印象を私に與える」（「文學の自律性など」）野間を批判した。竹内と野間は共産党綱領の扱いを巡って一見対立しているかのように見える。だが、注目すべきは竹内と野間の対立ではなく結託である。

竹内と野間の両者は、菊池章一が「竹内好氏と野間宏氏とは、まるで二カ国会談に出席した両国外相のあいさつといった工合に、話をかわしている」（「国民文学論の教訓」）と揶揄するように、実は対立などしていない。両者は「私たちは日本文學の危機の自覺の上にたつた竹内好氏の出發点をそのままみとめなければならない」（野間「國民文學について」）「野間氏の意見は、全體としては、私の考えとおなじであつて、したがつて私は、全體としてはそれにサンセイである」（竹内「文學の自律性など」）と述べ合っている。こうした両者の結託は、それぞれの文学概念の一致に由来する。では彼らの考える文学とは何か、竹内と野間はそれぞれ次のように述べている。

> 讀者の要求は素朴であるが、素朴なだけに職業作家のように文學の本質を見失うことはない。かれらは待つている。期待をかけて、辛抱强く待つている。失望しながらも、失望しきりになることはない。かれらは「魂の教師」の出現を待つているのだ。自身のモラルをふまえて両足で大地に立ちたいというやみがたい願望にかられて、じつと待つている。
>
> （竹内「亡國の歌」傍点引用者）
>
> 私たちのめざすこの国民文學とは、現在の植民地下の日本民族の生活の苦しみや、喜び、それをはっきりと表現しそれを徹底的に解放する文學である。これまでの日本の近代文學は主として小市民層、インテリゲンチヤが中心になってきて生れてきたものであってそれはまだ日本国民全体の心と魂を解放する形式をつくりだしてはいなかった。私たちはこの点をはっきりと批判してほんとうにひろく深く国民のなかにわけ入ってその魂を解放し、表現する文學を創造しようとするのである。（野間「國民文學について」傍点引用者）

竹内が自身に向けられた多くの批判の中から野間だけをまともな議論の相手に選んだ理由は、このように魂としての文学概念を共有していることにある。竹内は対立の存在を常態化し決して妥協しないことを議論の場における鉄則としていたはずだ。しかし竹内と野間のように議論以前より結託し、議論の場における最低綱領に魂としての文学を前提とするならば、そこでは他者を議論に導入するという国民文学論の実践的契機が失われてしまう。竹内にとって重要なことは「對立したままで進行してゆく」（「國民文學の方向」）ことであったはずである。福田恒存は竹内を批判し「理解しあふ對立とは八百長のことでしかあるまい。對立する以上、無理解が前提として必要であらう」（「國民文學について」）と述べていたが、この福田の主張は全く正しい。なぜなら認識を

共有しない他者との議論、その葛藤や摩擦によってこそ認識は高次へと揚棄されるはずだからである。

また国民文学論の矮小化とともに、竹内は自身の国民文学概念そのものも裏切っているといえよう。魂としての文学には「政治」と文学の臨界現象を生じさせる動的なダイナミズムがない。このように党員文学者の主張した政治はおろか、自身が編成する「政治」をも形骸化した、魂としての国民文学を可能にしているのは竹内自身の立ち位置にある。

竹内は「私はいつも整理ばかりやつているようで、氣がさすのだが、この場合、整理は一つの方法である。（中略）問題に近づく方法として、整理によるのが便利である」（「國民文學の問題點」）と自身を整理役に位置づけるが、これは自らの位相を論争の外部に位置づけることに他ならない。竹内はこの位置から議論を編成しオルガナイザーとして努めて政治を排除していくが、文学への政治の介入を見分けるために自身は決して議論の場に降りてこない。竹内が反芻するのは「一つの目標が争われるのは望ましい」（「新しき國民文学への道」）という独善的な定理のみである。竹内自身の手によって構築された議論／「政治」の場で提唱者自身が自己疎外し、国民文学は議論から生まれるという自説を唯一の説として論争の場に強要することを、我々は「暴力」として認定しなければならない。ゆえに我々には抑圧装置として機能するこのような国民文学論の場を維持する理由はない。

だが我々は竹内の国民文学論における論理機制全てを否認することはできない。竹内が国民文学論で成し遂げようとした「政治」と文学の揚棄という考えは、それらの対立の存在すら忘却してしまった現在の文学および文学研究への批判としてなお有効であるはずだ。竹内の国民文学論からはついに国民文学は生まれなかったが、しかしそれは「共通の広場」が形成されなかったことでもある。多声的な「政治／文学」空間を創出するための対抗理論としてあった竹内の国民文学論が、解体を目論んだ文壇や学会といったものの自閉性は変わりなく現存する。では記述的でない水準での処方を竹内に求めることはできるだろうか。竹内は次のように述べている。

> 語りかけよ。所在に、隣人に向って語りかけよ。そして隣人から語りかけられることを期待せよ。それによって思想表現の自由の所在を拡大せよ。これがマス・コミュニケーションに対抗して、思想上の国民的統一を作り出す唯一の道である。（「人と人との間」『婦人公論』一九五四・一）

竹内のこの揚言にナショナリズムを看取することは容易だが、それを批判することには意味がない。我々が迫られているのはここでもやはり選択である。我々は他者に向かって語りかけなければならない。だが同時に、相互に意思疎通できるという先験的判断を放棄しなければならない。あるいは対話の場を閉じようとする者に抵抗しなければならない。その時、共通の広場は閉ざされ

ことばの文學であるにしても、また、口ことばの文學であるにしても、まだ文學の及んでいない國民大衆の、日常の口ことばをエネルギー源とし、體系の骨子とした口ことばの藝術として出發し、それの發達と洗練による完成を目指さなくてはならないであろう」（「文學と言語生活」『岩波講座文學第一巻』一九五三・十一）と述べている。つまり国民文学論は第二の言文一致運動を要請するのである。

（3）竹内が用いた「近代主義」概念は、この時代にあって独特でありまた画期的であった。通例「近代主義」は資本主義を肯定することの意味で用いられ、主にマルキスト側からの批判的言辞として使われた。（例えば、大井正「近代主義の正體」『新日本文学』一九五四・一）しかし竹内は内発的な起因に依らない全ての輸入思想を「近代主義」と定義した。小田切秀雄は竹内による「近代主義」概念のオリジナリティとそのインパクトを高く評価し「日本の近代文学全体に対しても、その移植観念的な性格、近代主義的な性格を明らかにした。それと土着との関係について、立ちいって論ができるその前提のところまでは、かれが作ったわけですよ」（小田切秀雄・前田愛『生き埋め』状態の国民文学論」『竹内好談論集1』蘭花堂　一九八五・十一）と述べている。

（4）本稿が措定する竹内の「政治」概念は、権力の再生産ることなく竹内の理想どおり実際的に機能し始めるだろう。そしてそこでは「政治」と文学の軋轢が新たな表現を生み出すかも知れない。それは論理的帰結ではなく可能性の水準にとどまるが、しかしその場に現象するのはもはや「国民」文学ではありえないということだけは明らかであるはずだ。

**注**

（1）直接には次の中村光夫と浦松佐美太郎の発言を受けている。「**中村**　文學者は文學者で孤立した社會をつくつてる、政治家は政治家で自分達の孤立した社會をつくつてるということ、それは、とにかく政治をやろうと思えば、日本では、そこに入つて修業することよりほかないということでせう。そういう考えがあるでしょう。文學者もそうなんです。小説家にも批評家にもやはり牢固たる集團がある。（笑聲）どうしても脱けないんだな。　**浦松**　共通の廣場を持たない。　**中村**　勿論ないですな。」（「現代日本の知的運命　第一部・『政治・社會』」『文學界』一九五二・一）

（2）竹内は国語を「國語（國民的言語）」（「『國民の文學』とことば」『文學』一九五四・一）と記している。また国民文学論は、国民文学を作り出すための新たな国語を話し言葉と書き言葉が一体化したものと考えていた。例えば西尾實は「來るべき國民文學の創造は、それが、文字

プロセスに亀裂を生じさせるために自主的組織によって下からの活動を再組織化する必要を説く丸山真男の政治過程論によって更に明瞭な輪郭を浮上させるだろう。丸山は「現代のように政治権力の及ぶ範囲が横にも縦にも未曾有の規模で拡大し、国民の日常生活が根本的に政治の動向によって左右されるようになった時代において、かえってますます多くの人が政治的な問題に対して積極的関心を失い、政治的態度がますます受動的、無批判的になり、総じて政治的世界からの逃避の傾向が増大しつつあるといういたましいパラドックス」がある中で「民主主義を現実的に機能させるためには、なによりも何年に一度かの投票が民衆の政治的発言のほとんど唯一の場であるというような現状を根本的に改めて、もつと、民衆の日常生活のなかで、政治的社会的な問題が討議されるような場が与えられねばなりません。それにはまた、政党といつた純政治団体だけが下からの意思や利益の伝達体となるのではなく、およそ民間の自主的な組織（voluntary organization）が活潑に活動することによつて、そうした民意のルートが多様に形成されることがなにより大事なこと」（『政治の世界』御茶の水書房　一九五二・三）であると述べている。政治的に疎外された大衆を再度政治の世界へと帰還させる必要を訴える丸山と、同様の問題意識のもとに「政治的社会的な問題が討議されるような場」を国民文学確立の場として実践的に構築していこうとする竹内は極めて相似的な関係にある。なお本稿では本註の箇所以下の文章で、政策的な政治、あるいはイデオロギーに集束されるような狭義の政治と、本稿が竹内に見出す場の生成という広義の「政治」を、それぞれ鉤括弧の有無で概念を区別する。

（5）当時、岩波書店は『文學』の編集を日本文学協会に委託していたが、日本文学協会は『人民文學』に拠る日本共産党主流派と同じ政治的立場を採っていた。

（6）通称サンフランシスコ講和条約の正式名称は「條約第五号　日本国との平和条約」である。（『官報』号外第50号　一九五二・四・二八）この「日本国との平和条約」及び「條約第六号　日本国とアメリカ合衆国との間の安全保障條約」は、「昭和二十七年四月二十八日午後十時三十分（アメリカ合衆国東部標準時で同日午前八時三十分）に効力を生じた」。（「内閣告示第一号」『官報』号外第51号　一九五二・四・二八）日本の戦後はその出発時から文字通りアメリカの影（夜）にある。

（7）松本邦彦「在日朝鮮人の日本国籍剥奪」（『法学』東北大学法学会　一九八八・十）、横山實「終戦と戸籍行政」（『現行戸籍制度50年の歩みと展望―戸籍法50周年記念論文集―』日本加除出版　一九九九・十）を参照。

（8）竹内の次のような発言からは、朝鮮が自己確認のため

の単なる相対項でしかないことが垣間見える。「われわれ日本人一般が、むろん私もふくめてだが、じつに朝鮮について知らない。おどろくほど無知である。（中略）その知らないことが、朝鮮にとってばかりでなく日本にとっても、どんなに不幸であるかということの実感が乏しい。／これにはわけがある。朝鮮が十三年前まで日本の植民地であったこと、日本の敗戦によって独立したが、独立の形がスッキリしていないこと、そのため日本人の（ある程度は朝鮮人の方にも当てはまる）心の整理ができていないことが主な原因だろうと思う。」（竹内好「朝鮮を知らぬ我々の不幸」『日本読書新聞』一九五八・十・十三）「たとえば、われわれが、世界、またはアジアでもいいが、その像をえがくとき、朝鮮がほとんど視野の外にあるという現状がある。いちばん近い隣国であって、関係もいちばん密接であったのに、日本人の世界地図からはいまでも欠陥している。ふだん意識に上らぬくらいに無視されている。これでは正確な自己認識は不可能ではないか。もし『日本の中のアジア』に朝鮮が欠落しているとすれば、その地図は不正確であるから、当然に『アジアの中の日本』も不正確となる。／朝鮮を軽視するようになったのは、日韓併合の結果であって、それ以前はそうではなかった。（中略）朝鮮についての知識が欠落していることが、日本人の中国認識にも大きなマイナスになっている。自分が中国の勉強をしていて、そのことを痛切に感じる。」（竹内好「アジアの中の日本」『総合講座　日本の社会文化史第五巻』講談社　一九七四・一）

［資料の引用に際してルビ・傍点等を省略した。］

（ないとう・よしただ　本学大学院博士後期課程）